

## 磁気熱分解装置の特徴と仕組み

### はじめに

永久磁石を活用した有機廃棄物分解処理装置は、量子論に基づく有機物消滅の特徴を有しています。この理論は多くの大学の研究などで実験が行われ、世間的に広く知れ渡った実際の事柄です。

当磁気熱分解装置は減容効果が著しく、重量比で 1/300～1/500 になります。

炉内で電子、陽電子などの量子エネルギーを発生することも判明しています。

まず、最初の稼働するまでの立ち上げ時に、少しの発熱的種火が必要になります。連続稼働時には磁気ノズルの開きを 10mm～2mm ぐらいまで締めますので酸素は処理物を焼却するほど入りません。

それで、発熱的原子転換が起こり、中心部の温度は 800℃以上になります。しかし、それは中心点であり、その周りの装置内の温度は $\pm 60^{\circ}\text{C}$ ～ $\pm 150^{\circ}\text{C}$ 程度で、しかも、二重釜の構造なので外部には影響しません。

装置の外部は外気温 $\pm 30^{\circ}\text{C}$ 程度で、火傷をするような温度ではありません。

### I 磁気熱分解装置の特徴

- 1、7つのノズルには永久磁石が独特の配置で装着されているので、その結界効果で装置の中心部に当たる対角線の交点にゼロ場ができ量子エネルギーが湧きます。
- 2、7つのノズルを空気が通過すると、含まれている空気の僅かな水分が磁力の影響で分解され、マイナスイオン化してマイクロナノサイズの分子になります。

3, 処理する物にマイナスイオンが作用、量子エネルギーが放射されます。

4, 発生した量子エネルギーにより、有機物を分解処理します。その時に発生するターは、再処理することで、タール自体も分解処理され、減容が可能です。

これにより、<sup>ばいじん</sup>煤塵（燃料、その他の物の燃焼、または熱源として発生する物質）、ガスの発生を抑えることができる。

（例えばプラスチックの構造は「水素」、「酸素」、「炭素」などの「原子」が組み合わさったのが「分子」です。家庭やスーパーなどで見かけるプラスチックは「分子」が1千個以上つながったものが多く使われています。この分子の連なりをバラバラに分解し、プラスチック成形の前の「水素」、「酸素」、「炭素」にします。）

## Ⅱ 磁気熱分解装置の仕組み

1, 可燃物の減容化（減容率 1/300～1/500）に要する酸素量は炭化層を灰化するに足りる量だけで済み、むしろ火炎燃焼を阻止するために酸素供給を制限する必要上、封じ込め減容化処理法として適している。

2, また、炉内で浮遊する可燃物粒子（ガス）は炉内壁にタールとして付着して、再燃 焼にすると共に、乾留ガス（燻焼ガス）を燃焼させず、或いは大気放出せず炉外へ取り出すことにより凝縮液化などの後処理で無害化、資源化できるメリットがある。

3, この灼熱域は酸化反応による局所的高温化と高温保持が必要となる。

炉内に灰を敷き詰め、可燃物（有機物）を投入しセラミックス層と堆積可燃物との境界

（接地面）に灼熱域が生成すればセラミックス層が蓄熱作用を発揮する。

また、マイナスイオンが発生することにより、灼熱域の高温化が持続し、しかも炭化層の酸化反応に伴う灰化物がセラミックス層と灼熱域とに挟まれて高温溶融して減容化し、粉状セラミックスとしてセラミックス層に含まれて徐々に積み増されるので、次第に上位に伝わる。

炉内の灼熱域にはセラミックスによる上記説明が常に周期的に行われる。

### Ⅲ 参考（ブラウンガス）

1、ブラウンガスは1980年、ブルガリアのユル・ブラウン博士により発見されたガス。

「原子状の酸素と水素の混合ガス」で炎の温度は280℃と低いが何でも溶かしてしまう

驚異のパワーを有す。爆発しないで<sup>ばくしゅく</sup>爆縮するパワー。その対極にプロパンガスがある。

（爆縮＝爆発の圧力を外部に解放するのではなく、内部圧力の上昇へと向かわせこれによって通常では得難い物理現象を、発生させるのに利用される。）

2、相手の物質次第で温度が上がる。

ダイオキシンを分解する。

タングステン融点は3480℃だが、数十秒で溶かすパワーがある。